はしがき

本書は，19世紀末から21世紀初頭までのアメリカと日本の企業経営の歴史を，両者の相互に絡み合う関係に注目して叙述した，新しい試みの経営史テキストである。その特徴は，長期間にわたる日米両国の経営史を統一的な視点で描くために，大企業（近代企業）の形成・発展・変容を中心におき，それと相互前提するものとして人口，市場，技術，国際関係の変化を取り上げていることである。また，各時代のトピックスの理解を進めるとともに，企業経営の歴史的な流れが容易に把握できるように叙述していることも特徴である。

本書は大学における経営史関連科目のテキストとして使用されることを念頭に書かれているが，未来のビジネス・パーソンだけではなく現に活躍されているビジネス・パーソンにもぜひ読んでいただきたい。日々の慌ただしい変化の先にある大きな時代の流れ，すなわち歴史観を会得することができれば，ビジネスの最先端でなされる判断がより正しいものになるだろう。本書を，そのような歴史観を身につけるための一つのきっかけとしてほしい。

*

編集者の梶谷修さんに経営史の教科書を書きませんかと誘われたのは，もうずいぶん昔のことで，おそらくミネルヴァ書房から共訳書『ビジネス・ヒストリー』を出版した2014年頃だったように思う。頭の片隅にはずっと，経営史研究者として教科書を書いてみたいという思いがつねにあったが，ようやく10年後にそれを実現することができた。

10年間といっても，同じペースで執筆作業が進んだわけではもちろんない。すでに経営史については多くの素晴らしいテキストが版を重ね，あるいは新しいコンセプトのテキストが世に問われる中で，いったいどのようなテキストを構想すればよいのか，悩んでいた時間が長かった。しかし，どのようなきっかけであったかは思い出せないが，書くべきことを書くのではなく，書きたいことを書けばいいのではないかと思うに至った。知識は一人だけのものではなく共有されるから知識なのであり，また，議論されつねに問いなおされるのが知

識であり，そのようなプロセスこそ大事である。そうであるならば，一研究者として，皆が正しいということを考えて書くのではなく，むしろ自分の世界観・歴史観を全面に出してテキストを編んだほうが，活発な議論や批判を通して学会や社会に貢献できるのではないかと考えるようになったのである。

*

書きたいことを書くと決めてからは，作業は比較的早く進んだ。もちろん，内容が議論や批判に耐えられるものであることを確かめるために多くの文献や資料にあたる必要もあったが，それが本当に自分の書きたいことであるのかどうかに悩むこともたびたびあった。しかし，前任校である関西大学や同志社大学の経営史の授業においてドラフトを用いて授業をするなかで，そのような悩みも次第に解消することができた。ゼミの志望理由書に先生の講義は面白いと書いてくれたり，長時間であっても真剣な顔つきで講義を聞き続けてくれたりした多くの学生に，本当に励まされた。彼らがいなければ，このテキストは日の目をみなかっただろう。また，本年４月から勤務する神戸大学では，自由で刺激的な知的環境のなかで本書出版の最終準備を進めることができた。ここに謝意を記しておきたい。

法律文化社の梶谷さんには長い助走期間の初期から根気強く見守り励ましていただき，田引勝二さんには急な仕事にもかかわらず最後の最後まで丁寧に対応をいただき，感謝申し上げたい。優秀な編集者に助けてもらわなければ，やはりこの本は日の目をみなかっただろう。

学生，編集者，そしていちいちお名前は記すことはできないが，他にも多くの方々の支えを得て，本書は世に出る。学生のみならず広く社会人の方々にもこの本を手にしていただき，知識が共有され，議論や批判が活発に起こることを期待したい。

2024年６月29日　英国ヨークにて

西 村 成 弘